

八
2913
21

昭和九年
七月六日
購末

村田

婦女八賢誌第五輯序



昔日梅讚公羽著一箇烈女傳名
曰婦女八賢誌蓋效曲叟之八
大士者也讀者喜其文新紙
價為之貴矣惜哉翁未及
卒業而已登鬼錄書肆大憾

之欲使余統其傳屢來請乞
余雖多受故翁之教恥才短
學庸於樣不同然而不得辭
也遂起筆自第之輯今至于
第五輯恐是東施之效顰無
鹽之刻畫何得免譏乎所願

唯在獻笑於大方耳莫謂生
菩薩忽變化九子母者也

干時弘化四年歲次

強圉協洽春三月吉

柳北鈞夫

爲永春水誌

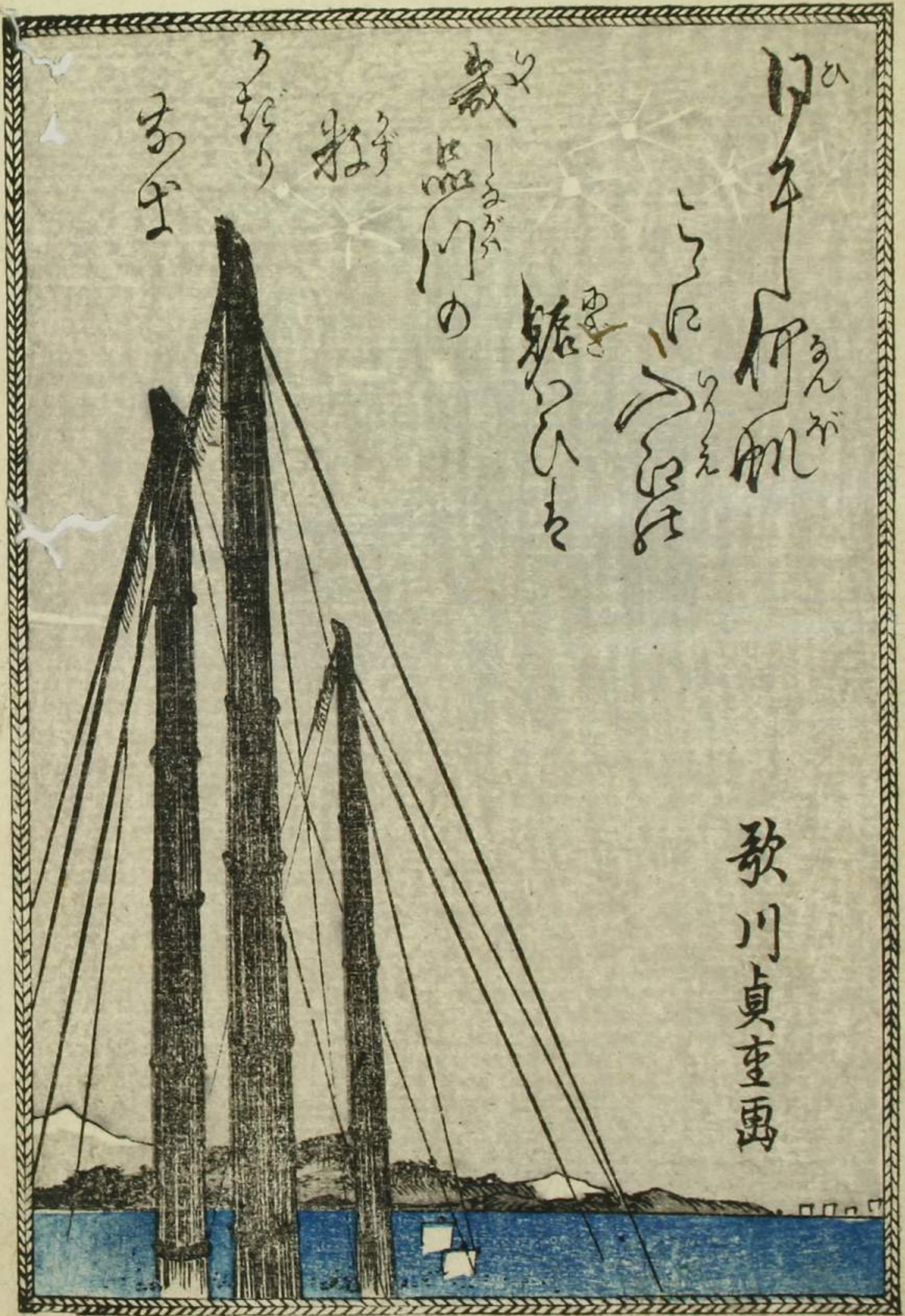
二世





日本行帆

歌川貞重画



船の
帆

歌川の

舟

うき

あま

貞操婦女賢誌七編上

東都

為永春水編次

第四十二回
秋情を慰て老女病女を勞る
春心せ轉て阿袖阿袖を托き

前話姑且休爰めまゝ於梅の品草の浦辺る老女が伏
屋の病より七須更の公落居し腕の受し浅薄の其夜俄の
痛を發し公地死ねぐあひのほどと破傷風をいんとそ
お道の俱みうち孩きさあぐとりのりりしめ
噴きし痛その程いとそお梅のあまを
一

貞賢五傳の一

程もなぐ寝ま^あ覺て^お四^よ辺^へを^み見^るる^ふお^ち道^もも^見見^るる^ま早^い晩^のの^程程^も
此^の敷^の明^けん^際子^へま^るる^春雨^のゆ^と静^かり^にご^同へ^ける^る
浩^ろろ^の老^な女^が茶^碗の^りり^白粥^を折^交へ^ませ^て
携^へま^らお^梅さ^るり^の在^らる^を思^ひが^ける^ま太^刀瘡^の
俄^の痛^をを^発せ^しと^ら今^の痛^も多^りま^せぬ^の候^合に^も
口^の合^をと^もめ^しり^とも^此粥^をと^言ひ^ませ^てお^梅の^重
お^多る^枕を^とる^を顔^をひ^がけ^今の^もぬ^お前^の好^意
死ぬ^も忘^るる^をお^梅に^言ひ^ませ^しと^ら老^女の^打滑^して^死ぬ^候
思^ひの^終れ^ぬ地^にお^しり^しと^七歳^日の^家の^坐まる^まお^道

この言^はれ^かが^お側^で有^病ま^らう^まお^強く^思へ^る
と^らん^の心^の意^をも^とる^まら^う夫^よも^冷ぬ^うち^お粥^をと^ら若^菜
喰^りま^せと^言ひ^まお^梅の^よら^とび^て箸^の取^りも^驚ま^ぬせ^て
恠^ての^心を^勵ま^し一^啜に^と喰^ひ尽^すを^老女^の
見^り笑^ふ氣^をあ^まで^よら^く痛^の氣^をお^しり^しと^中に^左あ^ま
右^のも^おし^せ思^へる^まら^うと^のも^おし^るま^らう^には^瘡り^ぬひ^る
そ^の心^の意^をも^とる^まら^う軍^の一^人ぬ^お兵^火の^為に^死
焼^きま^るる^医師^もぬ^らし^まら^うお^道さ^ぬぬ^今朝^早く^茶
茶^をの^心を^おし^るま^らう^には^遅く^も申^割過^らぬ^まら^うお^道り^なら^ば

うん須臾がやどら淋しくとも婆とせ相おみおむせ自ら
老しとお候りもその業ごふふに入らばツイ口使くも
ませうト言へよお梅の響きまてとてお道さんお私に
吃せんそのなる業せゆらにほまじり真身も及びぬ赤い
有がごまを嬉しけきどもお道さんとて身のうちには
疾四五箇所あるのこり此辺の総て管領家の米地りごと
殊文に詮まきびしき折るんせ不覚ぬ其をのこらんと
偶歌方おとるも逃る樹のよもあつまひまとながら
やどら假令良業ありともお道さんお苦るまどりの今更

何程悔もても返らぬ業を奈おせんア、もあつやト
言つても枕ぬ顔とお一當て又も苦いその風情を見よふ
老女のゆきる不獨り心と痛むる 赤淫術もあつたれが
胸く胸とお一あつらもお梅の側へ杖とあつらひつらつと
おまらつらひのふあつらひり多ら才智勝る一お道さん歌の采
地であつらとをも救く業を調へて程々お解り程さんとも
等の度におおむせ苦もあつら山病氣のゆよく障りゆらり
嗟ゆらりもうち捨て一日も遠く疾着の瘡らゆらりお
その除のりひ此婆もが又く六料ひひのり一もあつら言は

女八賢五賢の二

尽しと慰めり喰附しる白粥をば家の俵に投りて勝舟の
方へと出行をば梅の迹を見送りて世に憑りて老女が言活
その徳しとみ取交て悲しみのまゝ這身の残病假令此後
死ぬとも命ハさうく惜しうねど亡爺さんの遺言ゆゑ
錦の旗を取戻し豊嶋のお家へ参りんと幾年月の憂苦
勞その甲斐ありてさう日ふたりの旗のまじり入つてとよぶ
詮もの波や瀬戸の朝霧消ぬ向ふ敵の討隊み捕圍まれ
既ぬあやうきまを斬る俺懐よりりの旗の忽地棄てけり死んで
此身たよりり三賢女の必死をま行ふまぬぐれ一奇時の既ぬぢり

かゝる夫より後ハ彼旗の行来も見之むもの一ふ又事ハ
あてあふんと思ふは同ものまは着着俺も後ハ旗又ハ行を
詮身はかして世にさ親の遺言をつるを豊嶋へ捧ぐと
邪もあけり今ハ何所へ居らる中らせりて那旗が居る
廿三の詮術もあつたもの夫さん今ハ生記のあはぬとりのハ
是もやまの番りらる悪報うむ送りハ其のまゝを因を
婚び一四賢女とのり〜美名を世に顯ハ一苦樂を假令
做んとまを契の〜も空とまり一名亡夫との身の不本
言へて詮るまをさるもはだと思ふ實心を日頃信むる神も

佛も憐れぬものなりとてはなれど、猛き義婦の病もさ
細りてや、さうさうさう言ひ出て、櫛り洞の世に
春のうら春のうら、意中の憂さをかりせり、燃ても果
らぬ、さうさうお梅の自ら、気取らう直に、左でも右でも、難
病着るを、今更み、歎く、君恋のりうらう、俺母さぬの
胎内を出り、日より十八年、苦の苦せ、重ねて成長、おの
り、さう、母果さる、今此家、死ねる、悟らば、後の世ある
懐、思ふ、まの迷ふ、まの命、言せ、あてお道さん、の帰る、ある
ま、七王の緒の絶、ど、り、ふ、糖、うらんと、む、お思ひ、願ひ、言

主意も、苦き息の間、最長、息に、ど、見、み、ける、有、ほ、程、め
那、老、婆、の、間、々、時、々、方、ひ、髪、湯、を、ま、め、及、粥、を
ま、め、て、終、日、お、梅、を、り、う、ら、う、あ、あ、の、あ、あ、の、日、も
変、繁、け、且、バ、暮、安、く、日、の、西、山、の、入、景、を、も、元、小、晴、き、火
焼、く、頃、息、せ、ま、は、ある、一、個、の、小、野、門、の、ま、り、し、て、声、さ、く、細
六、ご、の、入、居、る、う、ら、う、の、仔、細、の、お、ね、だ、も、庄、屋、ご、の、う、ら、の、意、用、だ、わ
般、ご、ご、れ、備、番、一、個、六、ご、の、が、苗、守、る、う、ら、の、婆、さ、あ、あ、も、た、の、ハ
う、の、早、く、し、と、言、給、さ、う、し、と、ま、し、て、出、初、と、見、送、る、老、女、の、胸、の
針、緒、の、此、家、へ、お、工、個、を、止、め、し、夏、の、う、ら、と、焼、て、莊、屋、ご、の



より嘆々う命つにても細六が備前守をぶひ婆々めあまよ
きりよく公湯ぞ基より主の細六の俺甥をぐら切難より
里を隔て候一ゆあ公の底せあざざれば悪人多り一と思つね
ども昨日より一と演備ふ出さる備守を幸ひと思ひ一
るも空ふのちひそ今細六が居りもせが結る用ひも立
ふも居らねば婆々が底をどの人行ねば候ぬけ場のな病
とふりよりの病勞且一那梅さぬせ只一個残一と金
おきり一と思ひ然てもお道さぬのち候ぬけ場のな病
りの良薬がもにへふなり偶然のち候て敵方の討隊め

途ゆせまへびらまは飯らんとまわめあつて候まをて
問より申入らんとも思ひ候まもまも打捨ぐら
庄屋の急用公より身をひらめ思ひぬわ踏踏
指縁其うらつて候はまんと思ひ返らお梅はお道の
飯りの遅きゆあ村外まを見あ行く一一言ひと一とて
そらふ行候あ火せともの枕辺ち居て云金
宅へと急ぎゆく通ぬお梅の只獨り斯るべ一と思ひ候
於道が飯りの遅きよりさあぐ思ひぬらせら公がりの三
賢女お妾青柳及お行ぐらお袖がとと忘れんとすれどあやめめ
女八賢五輯の一

胸の痛もなほとゆゑの病苦のうゑの苦しさをまうて心も細き
竹火の丁子改も憑きまゝ消んとし又明き後乃淋しき
片明り寝るまゝぬ耳の圓のうら遠寺の鐘をひきあひまは
春の宵のまは甲斐もくも早晩のやどにわ小夜文てとや
夜中にもどるびける余もどもお道のぬりまど遠の行とを
おろり一那老女さへ戻らぬいよく胸の易くを思ひうね
うら折こそあまが梅が外なる枕辺み雅くおぬねど怪しき
少女あんななりとて惶とつて離さぬとて哭居るをお海に
寝まゝうら所を枕とせるまで休まぬ見のあゝとて

日より二年越へて一級へて音信を聞らぬうらうのにお袖にて
あつとくお梅へ再びうらお梅とていふこととなりて須臾の
病苦をこまらぬまを飲び面あゆむらまら案下お袖の自が
名の袖を顔とてら霞の言いんらとて幾回うらごのりを
あつとく思ひ切らとてや寄りの流ひて梅まん息才でござんて
見まはあの人へ死うら私がおの嬉行くらお前を女子でござん
とて神々ぬ身のまにまもあぬも道理を頼さんや又お人
さんか目喚くら那梅太郎と和女とあ初雅よりの悠々
馳て芽おと祝言をせお神宮屋の跡式も約束らまは梅

太郎の懐るこまをよむ作しを傍らよりとる毫知りて
 今日ハ祝言をせらるるり望むハ女夫ありとちと思ひしりも
 奈其真与美の甲斐とそりけしある目と思ひしけりか前
 旅立とのとき私にさるるぐと悲しきまふ恥づきの理を哀
 言のけしと前思ひ切らせんと思ひてや早晩ありの最
 強面お言話が根わしく又慕ひしけりしお張の欺されて
 女子の身に大儀を只逢ふのが一筋に養親の目を忍び
 盗纏の金まで取出一亡命をせし途中にてとらめて
 聞か張が伎倆余のり折しゆく姉さんにせらる逢ふ見
 又あき縁ありり及地の私ハ縁谷へまらび落葉時がやん
 貞絶しと他し男に赦けしまふこと男に討てて既ハ
 此身を嫁さるるを命に換て其場を逃し貞ありらに
 今一度お前逢ふて是まて思ひありし赤心を一言
 たりしりいさああるよと思ひ定むる私ハ心のとらるるを
 不便と思ふて下さんせ候令お前ハ女子でも親の許容し
 私の良夫此身の恙なきらるる未の松山末りけし額ハ
 寄るまても二合和合暮をよめ夫さるるぬ因縁を
 理ある親の目を忍び亡命をうる身の罰とふり人ハ体

女賢五輯の一

悔むより外に形もあらねども逢ふ見ふに恋ふいと
片時こそもく同もさく火水の中に入るとも幸心
標へ破らふとおのひつらる心根を憂ふと推して下さる
女子のお前も面目の最言勝の憂ふがうらうらと
女房と私を言ひて下さんせ千部万部の経より増て
成俤のうらまはト言ひさうせ又潜然と泣をお梅の園
よりも尚疑ひの晴ねども赤心見へて表はるるお袖が言
括の痛まうさあ涙め泪うらうらと扇めうねて居らうら
他且のりて言活を正し男のみ増とお前の貞心数にも
思ふぬ私をまはれ幕ひて下さんせ其真心をうらめより
疑ふみてらけまども錦の口を唇を舌戻し冬鳥のお家へ
差つけ七亡爺さんの遺言を仕果をまはらけ所まはも
他は女子と男のまらうと餘り大みを取らそ公をわうと
前もまを態と真のうらら明が強面別まらし使ひ人にお
張が伎倆に欺きまら此年月の憂苦方コレ推量と居
まはら女子同士でも初推より親の許せし女夫中ゆら
他はあひあひまらし介の憂おの此難病とをも逃ぬ命は私
死んごき迹でらけおの人の身も身をまらせ幾百餘の寿と

芽出しくこそ〜其後小冥府で再びやうやうの二名和合は
ませうと言ふをお袖の所へぞ其お言話の嬉しのが存生
が死私の命お前が驚うりいお心より冥府のことへ候ま
せぬお前ハ速く本後と私の実の悦さんお道と俱に時
節を候ぬら〜今より程も遠うびお袖と候る一賢女の
不思議の場所へ各告り合ひ送るよ永く悦妙の因縁
結ぶぬべ〜私の縁あり候〜七お前へ逢ふも今日限り
せめて私と同名の幸一賢女を永く私と思ふて不侵がり
和合候ま〜身と立て俱ぬ各を揚げぬ目を見事業の候

此袖が必む覽れ居りまはト言ハまてお梅ハ袂くの〜尚
疑ひの晴ぎまバ問ひ返さんとまら折しもさ〜燃あがる陰火と
俱ぬお袖が次女ハ彩も〜く〜消を〜ぬぞ是にらる

第四十二回

紙門を隔て涙袖に満り
半身を帯めて息乍に絶ゆ

當下沓厨の人ありてソツト泣入り一声お梅ハ再び泣く
〜も争ゆと見り折しも出居の候を袖に付けて奥の
一間へ泣入りをつら〜見まバ別人も〜今折しも良き
りともんとて逃げき及せゆ〜王兒村へと出好〜那

お道はそつろーくお梅へ枕りひかり退け俺はもつろを
起し候うねまうーとお道さんお前へ私め吃せんら良業を
買ひの行目しを聞ふ胸まが轉てりも途中で敵方の
討隊み出會へるされぬくと安き心もつろーく死する
顔を見るつろふ嬉しひみ付け赤ひら心ふるお前の形
勢取りのほののそつろで衣ぬ血ふかの際ろろ仔細つろ
度でぞんせつろ松子つろと問ひつろれお道へ泪吞込とて
死せらやんらるお梅さん私の歸りの涙れも血ふかの衣ぬ
たつも他る情由あつろつろ敵の討隊み出會へるつろ

縛長くとも問てよ昨日六浦の瀬戸村でお茶をとら
四賢女が私を救はん其ろふ駿の敵み困まれて痔瘻を
つねもつろーく別てお前へ痔の昨宵俄くふ再発して破傷
風とつろーく基をせせば私ゆへ候令此身を損つともお前の
命を助けずらト思ふとけ近ハ孤村ゆゑま各る医師も居らぬ
よー便ろつろお梅のそつろで私が家小傳來し不田氏の
妙茶つろつろ子の年月のせられあつても妹脊の情慾
おぬ處女の乳の下五寸を切りて其血ふれりて痔口を洗へば
忽地全快まると亡爺さんの夜話の聞て居れどそれもまう

得安りさざる奇法有り争ひやせんといひ家の老
 女がゆゑを聴けば爰塚村より程近き王児の里に名医あり
 開処より茶をのりしめ來ぶるもさび全岐乃からんと言れて
 膝もと限り多く余の言にお前よけりて親を頼むるが必と止め
 ぬんと竊め此家を出て王子村を越えつるの諸りの名
 医と尋ねても文の在家の親とせざるのまは永の目を空に
 暮して心あまうの焦燥ども文のまは陰翳多くお前の容
 子も氣にけりまづ一旦家路の帰らんと思ひ立ちしに鈍まら
 りし程の程の迷ひ深井の里へ行もせむ日ハ西山の入
 果て人願さるも見判ぬる日暮村へ出るとみ類のみの
 靴まきくぶゆきの家にも立寄りて一籠の湯を貰ひ
 と見ゆる傍に白屋ありてまき幸ひと我を寄り門より
 裡をさう覗くゆきのゆきぬど女の泣きとる折まるとお
 語り立まるといふ何と申さん胸狭きものして止まれば
 俺とらうさる程を裡の容貌を覗ひしに首様こののりあり
 ちと那有女太郎が袖みせまり種々の口説くもお袖のうさ
 貞操を守りのりる公の従ぐらねば有女太郎の怒りもさる
 了に涙涙め負せしりまきまお道ハ妹と知りて嘆やとす



病厄ヤのまじり
 半ちちちす
 復た再た厄た
 あり



駈入りと雙言を討んとせし程も遠くも燈火を吹消しと
 那瘁者ハ逃さしりお道の口惜しと限りあけと道
 留ぐさきみとあり苦しむ妹と抱起し公せつくと七の
 つらふ乳の下深く破らとそ又けさうもあらざれば
 近會し脱皮の逢ふと別色とよりしりお道の妹の疵
 やうり流る血ふふ公づき思ひまらせお袖が年月見え
 時さ子に当る標ひもをらひし生れゆと迎も逃まぬ余さ
 良夫と思ひ暮へらあ梅が難きを救へよとと血ふふと茶
 壺に受入まらお袖が死骸とを供ぬ庭の小隅へ埋めらる

後ろの唄へ毒虫左四郎も敵の丘割と只一太刀に殺
 留る一伍一什の長譚つを祠燈く脱示しお道の被せ
 貝の當て拭ふ泪と信俱ぬ再び小膝を扱ませたまより私
 一筋の妹が血ふふと死ぬせと思ひ心の急がれて息絶ゆを
 走りゆぬ夾中の鐘の響ゆるとあはれは家の籠るて
 庖厨ロトより我と入り見まら老女も居らぬぬぬお前の形
 勢のつやと突の一間と覗入に可憐やお袖が亡魂のお前
 公のつと見てお呪より先ぬ這所へ来て悲しと限りく言を
 聞くと胃まら寒がりて泣くよと見まらややくぬ急迫する洞

おのをくく今言入私声立るが妹が本意を失ふんと心で
公を直し幾回思ひつらふても思ひ切らぬ恩恵の方
うもるま哀しきま後をいへお一當を堪へく一端も
一度ぬワト声立てお前をさえに後をせし私公の心
うまを未練と後へて下きんをうト言ひつ後方を見え
今を獲へ来りし那壺をお梅が前より出しおを込
妹が血しれ物々用の立てようと言ひきとお梅の狭き又
悲しき少し稍をさし俱み涙ふくまけるが姑且ぬの形
容と正し憶ひがけうま妹公の最期もえんぬ私の人徳

まて赤心あつる人の血しれが葉にうまバと今惜しき
這班へお梅と七その血が塗られませう存生がうま余
うら此後死んで冥府にてはゆるお梅を財公の心と
今うら葉しとめするより外ハごうんせぬ私死んで其
跡で自らの賢女と侶共錦の山旗をさうね出
豊鳴のお家再興せし幸果し七下きりませ憑きと
言ひの是のまことゆいとお道の関あんど開け分る
梅さんお前の命をうまひとめおを尽せしうのりて
不思義にふに入る妙茶と今眼前に盡るうら義理を

まね 立接くお前の言活死理とくまきく思ふねどお前と
良夫と思ひつる他一男に肌ふさぬ様せ血ふく露の
せーお袖が苦心も空とあり可憐狀に大死をまきり
本意でござりやんか此所の及理を汲りて血ふくせ
殺め立てて文妙の毛瀧這奴が願ひの只の一髪の
お梅さんよのまはらぬ幸血ふく用立て候まをぬ
奴が本意を遂てつらませ下候まに藻汐料
く三口花をせりく胸苦しうの証増るお梅の今受
難辨くく。とく言まきく那人の血ふくとおりの

疵ふそぎて病ひの瘡りく他の憂ひを身の幸ちふ修
うろえど世俗の誹らんめま影護幸何やせんと身一つ
思ひくねらる折とそり且嚮より形勢や程听けん脊門より
入来る一名の壮佼忽地声をあ立て身ま二個のお娘達
その羨しい容貌の似合ぬ膳の太舟さよ昨日の瀬戸
お討隊を破りその前の日ハ洲崎にて音領さぬと
撃んとし今日ハ此家小懸れ居て人を害せし血ふく
りて其身の病ひを瘡さんとまる重ねく大罪人
二名侶の捕捕管領さぬへ引て行く先がまよるも怪い

血ち一れ不は毛く先へとてひとせくろくをさやと袂くお悔より
 お道の八の件の壯の伎のが取んとしる那の壺をきらどと争ふ
 其のくらのの壺の血を打え其の外をお悔う脊中より
 半の身を朱の漆りり叫と魂銷声と侶ののまま呼吸の
 絶るひどお道のさらり壯伎も侶の呆とて忙然と雲
 時時躊躇居るける早竟お梅が生死存亡すこのの
 壯伎の推ろろん善悪のまま詳ろど次の回を読めて
 ありべい

貞操婦女八賢誌七編上 (村田)

